

次郎長

題字
竹内宏

次郎長翁を知る会
会報「次郎長」
42号
令和5年6月1日発行
発行／編集
次郎長翁を知る会
会長 府川充宏

「次郎長さんは教師のお手本」

—没後一二〇年 新資料の発見！

実録 誰る晩年の次郎長像—

次郎長翁を知る会 副会長 山本量正

次郎長翁の後半生は、世の為に尽くし民に愛された人物であった事は、地元の伝承やこれまでの翁に関する出版物の中で紹介されてきた。没後一二〇年、年数を経るにつれ、翁の事を語る証言者は少くなり、伝承を裏付ける資料の出現すら確率が低いと思われていた。しかし今ここに晩年の翁の姿をリアルに語る新たな資料が見つかった。本稿は、明治・大正期の小学教育の模範的教師かつ校長であった人物を縁者にもつ当会の山本量正副会長が、その資料をもとに解説したものである。

へはじめにへ

この資料を発見したのは本当にふとしだきつかけであった。ちょっと前置きとして長くなるがまずその経緯を書かせていただきたい。

私は最近、わが家の歴史を子供、孫たちに伝え遺すため、江戸時代の「廻船問屋・山本屋清右衛門」の歴史と共にもつと身近な祖父母や父母の「履歴書」を作りうとしている。

そのなかで、ます祖父「山本量平」（以下「量平」）に注力している。「量平」は明治二十四年（一八九一）生れ、明治維新後の廻船問屋から転業した家業「酒類商」を営みながら戦前の清水市会議員、静岡県会議員、在郷軍人会清水分会長（在任中の昭和三年、梅蔭寺の初代次郎長銅像建設に尽力）、商工会議所議員など歴任したが、一方ではその妹（つね）が二代目お蝶の連れ子「清太郎」の子供「入谷麟助」（いわば次郎長とお蝶）

の孫）に嫁いだことから次郎長との関係も生れ、これまで私は会報「次郎長」や戸田書店の「季刊清水」にも次郎長関連の記事を書いてきた。

そんな「量平」について資料を漁っている中で最近「国立国会図書館」の「デジタルアーカイブ」という検索サイトで何気なく「山本量平」を入力し検索したところいくつかの項目が出てきたがその中に「量平」が明治四十一年（一九〇八）に卒業した「静岡商業高等

学校」の卒業者名簿があった。

その項目をクリックすると卒業後の就職先が記載しており、量平の欄に「東京・手工館」とあった。

私はその名前には全く心当たりはないかったし、また「量平」は当然の如く商業高校卒業後直ちに家業の「酒類商」に従事したと思っていたので「え！」と驚いた。

そして、また「デジタルアーカイブ」で今度は「手工館」を検索した。そうしたらそれは当時の小学校などの教材や黒板などの扱う会社であった。家業のメインは「酒類商」であったが文房具や化粧品を扱う「雑貨商」も兼ねていたので、その関係かとも思ったが、よくよく見る

出版もしている会社であった。

ここで、今回の大きな発見に出会う。

それは、その出版物のなかに、私のおぼろげな記憶にある親戚、「加藤末吉」（以下「末吉」）の名前を見つけたことである。経歴の詳細は後記するが、「末吉」は「量平」の姉（みつ）が嫁いだ夫で小学校の教師だったと記憶が蘇った。（実はかつて山本家の家系図を作成していた時に「みつ」がなぜ殆ど縁がない「周智郡山梨村」（今の袋井市）出身の「末吉」に嫁いだのか不思議に思っていたが、後述するように「末吉」の経歴からその謎が解けた。しかも別の資料からこの縁談は何とあの西洋医師「植木重敏」の仲立ちによるものであった！）

さては、「東京・手工館」就職は「量平」が一時の修行として「義兄」の「世話」になったのかと推測した。

問題はここからである、今度は「加藤末吉」を入力し検索した。すると本当に数多くの教育関係、特に「小学校教師」のための著書が出てきた。どんなことを書いているのか気になりこのうちベストセラーと言われた「教壇上の教師」や「教室内の児童」などとともに「教壇四十年の體験」という自伝をプリントアウトした。（写真参照）するとなんと

「教壇四十年の體験」のなかに『大校長と僕客次郎長』という項目があるではないか。じきじきする気持ちでますさつと目を通しそして熟読した。その内容を出来るだけ忠実に記述しようと思うが、その前に「加藤末吉」とはいかなる人物か書いてみたい。

△加藤末吉とは△

以下に年表風に経歴を記載する。(一)
部推定。年齢は数え)



加藤末吉

明治二十四年(一八九一)三月 静岡師範学校卒業(二十歳) 清水高等小学校(正式には「静岡高等小学校東部分校」(明治二十三年一月新設)赴任。
なお、この高等小学校には六代目鈴木与平が明治二十六年に入学しており教えた可能性がある。

明治三十一年(一八九八)「田高等学校」となる。△

〈赴任後數日して末廣を訪問、次郎長に挨拶〉

明治三十二年(一九〇三)九月 東京高等小学校(明治三十一年(一八九八)「田高等学校」となる。△

合いとして次郎長についてもかなり詳細に、また具体的評が書かれている。

「蜂屋定憲」は徳川家達について駿府に移住してきた旧幕臣で次のような経歴である。

天保十四年（一八四三） 七〇〇石の旗

本の家に生まれる。昌平齋等に学ぶ。

慶応二年（一八六六） 奥詰銃隊

慶応四年（一八六八） 陸軍書院組差団

役下役。徳川家達に隨身して駿府に移住。

明治二年（一八六九） 静岡藩学校入

学。その後漢籍の教授に。

明治十一年（一八七八） 静岡師範学校

長

明治十二年（一八七九） 兼静岡県衛生

課長（明治十二年のコレラ流行対策にあたる）

明治十四年（一八八一） 静岡県學務課



蜂屋定憲

明治十九年（一八八六） 再度 静岡師範学校長

明治二十四年（一八九一） 加茂郡長

明治二十六年（一八九三） 没 行年五十歳

以上のように、蜂屋定憲は静岡県の教育、衛生、地方自治に貢献した。そして

「末吉」はこの項目の前段「大校長」の中で彼について「偉大な風貌」、「寛容追づす」、「漢籍武術等の造詣が深い」「嚴肅偉重」、「温厚寡言」、「学生たちは神の如く敬慕した」などと高く評価し賛辞を贈っている。

また後述するように蜂屋校長が次郎長と懇意であるかのような記述があるが、それは蜂屋が旧幕臣として、明治二十年（一八八七）興津「清見寺」に建立された「咸臨丸殉難諸氏記念碑」への寄付をしたり、また落成式の役員を務め、焼香も次郎長の数人うしろの順番であるなどかなり親しかったことが推測される。

そしてその大人物と肩をならべる人物として次郎長が次のようにならべてある。

△次郎長親分のこと「その一」△

前置きが随分長くなつたがここからが本題である。

教壇四十年の體験



明治十九年（一八八六）再度 静岡師範学校長

明治二十四年（一八九一）加茂郡長

明治二十六年（一八九三）没 行年五十歳

以上のように、蜂屋定憲は静岡県の教育、衛生、地方自治に貢献した。そして「末吉」はこの項目の前段「大校長」の中で彼について「偉大な風貌」、「寛容追づす」、「漢籍武術等の造詣が深い」「嚴肅偉重」、「温厚寡言」、「学生たちは神の如く敬慕した」などと高く評価し賛辞を贈っている。

また後述するように蜂屋校長が次郎長と懇意であるかのような記述があるが、それは蜂屋が旧幕臣として、明治二十年（一八八七）興津「清見寺」に建立された「咸臨丸殉難諸氏記念碑」への寄付をしたり、また落成式の役員を務め、焼香も次郎長の数人うしろの順番であるなどかなり親しかったことが推測される。

そしてその大人物と肩をならべる人物として次郎長が次のようにならべてある。

て、年若い私等でも絶勝の禁じ難きを覚えたのであったが、當時私等をして、なお一層その感を深らしめたことがある。それは、この大親分既にチヨン醤を切つてはいたが、当年を想望するに足る治郎長さんが、真摯な態度で、校長に接した模様であった。二間程離れた處から、丁寧に挨拶した後、後ろ向きになつて、手を拍ち大声を発し「野郎共皆ここへ来い」と呼び、やがて子分たち十五、六人を二、三列に並べ挨拶せしめたのである。この時校長は唯大きく軽く答礼して「色々と世話になるがよろしく」といわれたが、私達はこの芝居で見るような様子を後方から窺つて、校長の貴禄の大なるを知ったのである。元来治郎長親分は山岡鉄舟翁の尊信者である。翁と共に幕臣たる校長には何か旧縁があったかも知れないが、それにしてもその下にも置かぬ歓待ぶりは、親分の純情さを考えさせられると同時に、大校長たる感じの益々深きを覚えたのである。かくしていよいよ水泳するにしても、当時は未だ学生の水泳が未熟であった為に、相当の警戒を払つたものである。親分は所謂野郎どもを適当に配置すると同時に、大兵肥満な自分も高鉢巻裸体で、校長の護衛そのもの如く、伝馬船に乗つて助勢を怠ら

ず、やがて水泳を終え陸上に引挙ぐる

や、眞清水を幾本かの四斗樽に限りなく酌んで、好意を表せらるる心づくし等は、到底金錢の力ではできぬ」とある。(以下略)

△次郎長親分のこと〔その一〕△

次は「末吉」が師範学校を卒業し、最

初に清水高等小学校へ赴任した際次郎長に挨拶に行った時の様子であり、これは明治二十四年(一八九一)春のことと推測される。

・・・私は恩師蜂屋大校長を語る引合いに、次郎長さんを引っ張り出して漫談に及んだが、どうもここまで話を運ぶと、今少し付記して次郎長さんの持たれた人情味を紹介させて戴かねばならぬ。次郎長さんの本名は、山本長五郎と呼ばれた、明治二十六年六月十二日に『肝臓癌』を以て大往生を遂げられた。享年七十四歳。豈の上で死ぬのが不思議、薬を飲むのは勿体ないといつて、周囲の人勧めをいれなかつた。「命のある間は是非大切にせよ」と医師が二時間説法して、やっと服薬したとは、有名な話であるが、清水市内下清水梅陰寺に葬り、碩量軒雄山義海居士と諱し、大きな墓碑と銅像が建てられ、その余徳を偲んで遠近

弔祭する人が頗る多い。

私は師範学校を卒業して、最初の奉職地が清水であった。兩三年前蜂屋校長に引率されて大親分の風貌を知つており、且つ鯨の眼のように細く小さく何とも言えぬ人なつかしい方であると思う処から、赴任後數日を経て、新任の挨拶をし

たものである。

大きなあぐらの居すまいを直し、お弟子さんかね」「それは不思議なご縁だ」「どこにおいてかね」「あの家は堅いえい内(家)だ」「御都合でねうんち(俺のうち)へおいでなさいてもよい」兎に角お一人じゃ洗濯ものが困るかもしけれぬ。な、お蝶(細君の名前)時々洗濯物の面倒を見てあげ。

「先生ふんどじでも何でも構わねい、お出し下さい」と、いた親切ぶりであつた。

りやっておくんな。わっしゃこの間女衆

の学校を建てよつて演説したものだ」といつてゐる。四、五人の子供たちが、大声をあげて、「親分さん、お湯へ行かないの」と誘いに来た。「うん、今行くから、おめいぢや一足先に行きな」といつつ袂から小銭五、六銭を出して与えた。これは勿論錢湯代を与えるのであるが、それと同時に、煎り豆だの菓子の若干も出た。「今日は菓子がねいから後でやるぞ」といわれ、あるだけ全部を分けてやつた。その時私は想像した。なる

うが、それと同時に、煎り豆だの菓子の若干も出た。「今日は菓子がねいから後でやるぞ」といわれ、あるだけ全部を分けてやつた。その時私は想像した。なる

ことは立派な教師だと考えさせられた。これは親分の背中まで流すであろう。・・・

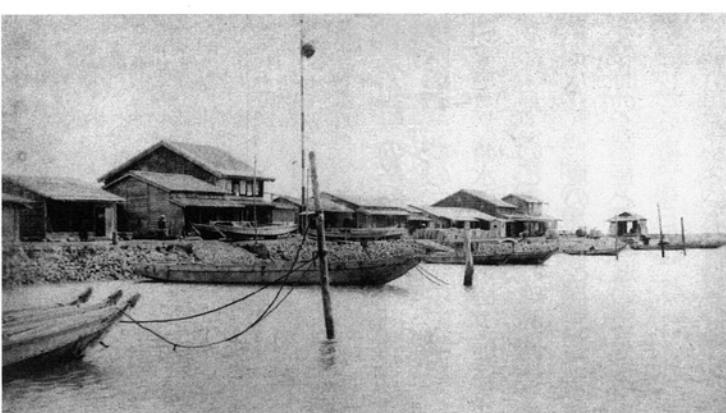
子供等の為に話は遂にとぎれたが、私は壁間に鉄舟翁の額の懸けられてあることから思い出し、私の兄が鉄舟先生の門人(注を下記)であることを述べると、親分は膝を進め「名は何と言わるるか。今何處に居るか。或いはお眼にかかつたことがあるかも知れない。兎に角不思議なじ縁だ。

どうか清水で長く先生をなすつて下せり」といううちに、子供たちが再度の迎えで。・・・「では夜分にでもお遊びに」「御用の節は遠慮なく」「ようお尋ね下さった」「蜂谷大先生にもよろしく」と・・・いひじりで、その日は辞退してしまつた。

程次郎長さんは教育が好きだ。子供を可

愛がるというが、実に事実である。無心な子供達が入湯を勧誘に来るのは、その貢錢や菓子を欲しいというばかりでもあるまい。その打ち興じて入湯するのが何よりも楽しみであろう。恐らくはこれで

りやつておくんna。わっしゃこの間女衆



明治二十年代の波止場風景。左の二階屋が末廣。(徳川慶喜撮)

〔注〕「末吉」の兄は「安平」といい、山岡鉄舟の塾「春風館」の高弟。鉄舟の流派「一刀正傳無刀流」の剣士だった。この親分、年はどつても物覚えのよい人である。私は脚氣症に冒されやすい為

に、初夏の候は早朝から海岸の散歩を試みたものであるが、時々親分と海岸で出会うのだが、其の最初からよく覚えていた。私が六週間現役（軍隊教練のこと）を終わって帰校数日の時、海岸で出会うと「先生、色が黒くななさいたな！」と言つてくれた。「道理でしばらくお眼にかかるないとと思った。」「先生でも兵隊をやるのか。えいこっちやのう。」とほほえまれた。そして蜂屋大先生や愚兄の健康を尋ねてくれたことであつた。

＜その他エピソード「その一」＞

「末吉」は前記の通り「小学校教師のお手本」を出版するかたわら、各種演説の模範例文を書いていた。

例えば、昭和五年発行の「式辞挨拶十分間演説集」や昭和十二年発行の「実用式辞挨拶演説集」である。

そんな「末吉」に昭和三年七月の次郎長銅像除幕式における「祝辭」の草案を誰かが依頼したらしい。

「教壇四十年の體験」の中でこんなことを書いている。

・・・次郎長没後、有志が相計つて銅像を建設された時、私は知人の囁に心じ、に次郎長さんがやるというから、誰も不除幕式祝辞の起案に与つたが、『當時、

特殊の教育を経ず、また特殊の武技を修練せりと聞かざれども、満身これ膽（胆）、義にして勇、仁にして俠、簾にして直、然諾を重んじ（一度請け合つたことは必ず実行する）、情誼に敦く、克（よ）く上に服し、厚く下に施し、教育教化を尊重し、道の行うべきは必ず行い、為すべからざるは寸毫も犯さず、人情に濃かに、公心に秀で、云々』と認めて、その徳風を景仰した次第であった・・・

次郎長翁への最大級の美辞麗句であるが、この依頼人はひょっとしたら「量平」も銅像建設に尽力した在郷軍人会清水分会長として祝辭を述べていることから、「量平」が義兄の「末吉」に依頼したのかもしれない。

＜その他エピソード「その二」＞

次郎長が、実相寺で「女学校」設立のための演説会をしたとの話が載つている。

「末吉」が当時の郵便局長（北村祥之助か）から聞いた話として、

・・・『会場は実相寺という相当大きな寺の本堂であった。なにしろ一世一代の演説をするというふれ込みであった。殊

の町にや、えい（良い）小学校は出来たが、まだ女学校がない。欲しい欲しう。人間だってそうだ。

学問をさせなきゃダメだ。この清水の町にや、えい（良い）小学校は出来たが、まだ女学校がない。欲しい欲しう。人間だってそうだ。

思議がつた。「喧嘩は上手でも演説はまづかろう。」「何、できなかつた。」といふ訳で、珍しいものは誰も見たさに随分集まつたものだ。かなり広い本堂に殆んど一杯といつてもよい程であった。私も家が近いので、冷やかし気分で行つてみたのです。親分は早くから来ていて、「ゑるゑるゑるぞ・俺がやるぞ」「よく来て下さった」と挨拶していた。それが何時頃であったかしかと覚えてもないが、仏壇の正面に立つて、彌々やりはじめた。聴衆は大騒ぎ、親分は大喜びで開口した。「おめいこっちやよく来て下さった。お礼を申します。これから俺の話を聞いてくんな。それは曰こう横町に三毛猫があった。こっちの横町には黒猫がいた。三毛猫の飼い主は一生懸命に育ててネズミの捕りようを仕込んだから近所から貰い手が沢山あった。けれど、一方の黒猫の奴は何にも構わぬものだからネズミを捕るよりもっと手軽な魚を盗みおつて、皆さんから泥棒猫だと嫌われ、誰も相手にしないんだ。みんなどう思う。人間だってそうだ。

以上が郵便局長から聞いた話で、それ繼續けて

・・・なあ、聞くといひによれば、これより以前に東京から英語の先生を雇つてきて、青年等に語学を学ばせたり、また清水小学校へ逸早くオルガンを備えることにしたということである。

当時学校にはまだ唱歌が正課でない時に、早くも準備したことほど左様に新人といおうか、先覚といおうか、開港場清水の前途を考えたものである。そして話は前後したが、この演説が導火となつて、女子の補習学校が設けられ、高等小学校となり、後には高等女学校も出来たのである。

（注：この話は明治四十年（一九〇七）四月に田高等学校の付設として「女子技芸学校」が設置され、その後「田高等女学校」から「清水高等女学校」、「清水高等学校」へとつながっている）



晩年の次郎長肖像画

△最後に△
その他にもいくつかエピソードがあるが紙面の都合もあり割愛するが、次のような文章で次郎長の人間味を表現し締めくくっている。

・・蓋し春風秋雨千歳の下なお雄名は伝わるであろうが、私は其の満身慈愛に満ちた、肌触りの良い好々爺の風貌は、いつまでも忘れ難いのみでなく、私の教員生活中若し仮に多少でも親切らしく温情のこもったかの如き行為をなしえたときは、必ず寛宏にして純真な親分の調子を思い出し、それを真似たものといつてもよい。現にある時、久能山東照宮に参

拜遠足を試みた時、彼の千余段にも及ぶという石段の中腹で、高一の男児が腹痛を訴えたので、私は終始背負ったが、この場合の如き、治郎長さんならきっとどう位のことは行うであろうと思って、勇氣を出したに過ぎなかつたことを、今もなおありありと記憶しているような次第である。兎に角、私の為には、親切を教えてくれた大教師であった。故に甚だ余談めいていいるがここに記したのである。

△あとがき：思つゝ△

以上、内容的に検証が必要な事柄もあるが、大部分は「また聞き」ではなく、実際に会った時のことであり、次郎長の言葉使いも含めて実にいきいきと晩年の次郎長の生活や人間味が表現されていると思う。また、今の時代では受け入れられないような内容もあるが、明治中期から昭和の初めにかけて小学教育の権威者が、次郎長を「教育上の理解者」としてまたその性情は「純情」、「侠気・男氣」、「義理・人情」として、最後には自分の「大教師」であったと評価されているのである。これは「加藤末吉」の縁者として、また「次郎長の縁者」として大変うれしく思う。

さらに、「末吉」が一貫して「次郎長

さん」とか「親分」という敬称で記述していることもうれしい。

そして、晩年の次郎長のエピソードと

して「水泳の話」やその好々爺ぶりをあらわす「銭湯」の逸話が加わり、お蝶に「ふんどしを洗わせるから持つておい」という話も面白かった。お蝶さんとの仲睦まじい様子や「くなる直前までいわゆる子分が「十五、六人」は「未廣」で寝起きしていた様子もわかつた。

ひょんなきっかけで「次郎長さん」の

次郎長翁没後百三十年 その功績と生き方を次世代へ

次郎長翁を知る会 会長 府川 充宏

次郎長翁を知る会は、平成四年五月に設立しましたので、現在三〇年目を進んでいる最中といえます。

また一方、次郎長翁自身は、本年六月十一日に没後百三十年を迎えます。大切な歳の節目が巡り合い交差する時節であると思います。

今から三十年前、清水商工会議所が中心になって、「清水から出た全国一のスター、清水の次郎長さんを盛り上げて

晚年を知る貴重な資料を見つけることが出来、またこういう形で皆様にご紹介できることを大変うれしく思う。

実は、この資料の発見を機に「加藤末吉」のご子孫と連絡を取り、「生の日記」などの資料をお貸しいただいた。そ

の中には「中井俊之助」ほか次郎長となる深い名前も出てくる。これらの資料も整理して機会を見て、末吉の清水時代の交友、生活ぶりを書いてみたい。

（山本）

この創立三十年の節目に際し、先ずは

その三社さんに御礼の気持ちをお伝えし
ようじいからじで、次郎長翁を知る会運
営委員の一回で一致し、各社への表敬訪
問を計画しました。

鈴与さんへのご挨拶は、会社の代表様

より貴重なお時間を頂く為に、綿密な連
絡をとり、暑い夏の最中を避けて九月の
初旬に訪問が実現しました。当会の石野
副会長、山本副会長、中田理事、浦田事
務局と会長の府川（私）が鈴与本社の貴
賓室に招かれ、鈴与平代表がご臨席下

さいました。鈴木代表は、次郎長翁につ
いて大変興味をもっておられ、とてもよ
く御存知の様子でした。談話は次郎長翁
の功績をめぐり、終始和やかな雰囲気
で、一時間以上お付き合いさせて頂きま
した。「次郎長さんの社会貢献や生き方
等を若い世代に継承してゆく事はとても
貴重で大切な事です」と述べられ、次郎
長翁を知る会の活動を後押しして下さい
ました。

清水銀行さんには翌十月にご挨拶の予
定でしたが、九月二四日の大雨が「七夕
豪雨」以来の出水となり、市内広範囲が
被災したため、十一月初旬に変更して訪
問いたしました。

御臨席下さいました岩山頭取からは、
冒頭に延期の理由となった水害の事に触
れて「ATMが水没したが、社員で奮闘
し早期回復が出来て、何とか被害やお客様
への迷惑を最小にとどめた」とお話
し下さいました。まるで戦争の様な状態
の忙しさであった事かと私共は想像した
事でした。



岩山頭取はご自身が富士市出身であ
り、次郎長翁が富士大渕に開墾をしたこ
ともお話し下さいました。また、次郎長
翁を知る会の活動や意向についても「前
任の豊島頭取からしっかり引き継ぎを受け
ました」と後援の継続をお伝えください
ました。

はづくもフーズさんは、毎年六月に行
われる次郎長翁を知る会総会へ担当者の



りましたので、直接訪問は致しませんで
したが、前二社様と同様に、とても好意
的に当会の事を考えて下さっていること
を感じ、非常に嬉しくありがたく思いま
す。

こうした清水を代表する企業様の後押
しを受け、「咸臨丸事件」で戦死の人々の
供養を、自分の命をかけて実行した義
挙」や「清水のみなどに岸壁なければ、
鉄の船が清水に来ることが出来ない」と
波止場づくりに尽力したことなど、世
方がご出席くださり、「次郎長翁を知る
会さんの、はるかもフーズに対するお氣
持ちは充分に承知しております」との趣
旨のお返事をあらかじめ頂戴いたしてお

の為人の為清水の為に尽力した次郎長翁
の社会貢献や、その生き方を、今後も若
い世代へと伝えてゆきたいものと、運営
委員一同、話合ったことでした。

なつて、皆も待ちきれなかつたのか早々
と集合したためである。ただ残念ながら
会員の参加者は思うように集まらず、
多くの一般の方にも参加して頂きようや
く成立した今回のツアーでもあつた。と

春の史跡探訪ツアーワークshop 『侠客次郎長之墓』を揮毫した

榎本武揚ゆかりの史跡を訪ねて

運営委員 北村昭夫

朝の爽やかな日差しを浴びながら、
十九名の参加者を乗せたバスは予定より
十五分も早く清水駅港口を出発した。コ
ロナ禍での自粛がようやく終息し、実に
四年振りにバス旅行が実施できる運びと

もあれ空は青く晴れ渡り桜も咲き乱れ、絶好の行楽日和となり車内の気分も上々である。

我々を安全に快適に導くバスは静鉄観光マイクロバス。にこやかな池田運転手がハンドルを握り、添乗員は元ミス森町でなんと『森の石松まつり』では石松役も務めた事があるという河口さん。何という偶然なのかこれも次郎長さんのお導きであろう?と話が弾む。

次郎長翁没百三十年。その節目である今回の研修目的は、梅蔭禪寺にある『俠客次郎長之墓』を揮毫した榎本武揚の、ゆかりの地である隅田川近辺の史跡を探訪する事である。車内ではまず笑顔溢れる府川会長の挨拶で始まり、次いで中田運営委員による勉強会が開かれた。二十頁にも及ぶ詳細なテキストは中田さんお手製の力作で、それにより榎本武揚という人物の基礎知識をしっかりと身に付けて準備は万端。バスは一路花のお江戸へ向かった。

【妙見山法性寺】

多少の渋滞は有ったものの、出発での貯金のおかげで予定通り最初の目的地『柳嶋妙見山法性寺』に到着。満開の桜や花海棠が咲き乱れる華やかな境内に入り、檀家で語り部の小倉さんという御年



語りべの小倉さんと上萬墓

九十歳になる可愛いお婆ちゃんに案内をして頂く。寺院入口の左脇に目的の『俠客上萬墓』があった。上萬親分は幕末に広大な縄張りを築き、配下二千人を持った大親分で、次郎長とは兄弟分であったそうだ。この墓石は梅蔭禪寺にある次郎長の墓石を建立した際に、その一枚石の多摩石を分けたものだと云われていて揮毫も榎本武揚だという。彼女からは三つに分けたとも聞かされたが眞偽のほどは分からなかった。この寺は葛飾北斎が信仰し、その名の由来となつた北辰妙見大菩薩で有名な妙見堂があり、また歌川豊国や近松門左衛門の碑など数多くの石碑が立ち並び、名画ギャラリーまであるといふ文化の香りも豊かな寺だった。

【墨田公園】

朝も早かったのでお腹も空き、隅田公



東京都墨田区業平 葛飾北斎ゆかりの妙見山法性寺にて

いう一石二鳥の目的があったそうだ。堤の隣には正岡子規が滞在したという『長命寺桜もち・山本や』があり店の前には購入者の長蛇の列が。もちろん我等が参加者達も花より団子と並んだことは言うまでもなく、おまけに向かい側にある『言問団子』にも急ぎ足で向かっていった逞しい人達も。



墨堤植桜の碑にて



榎本武揚銅像

次いで梅若公園内にある銅像榎本武揚像の見学へ。大隈重信や渋沢栄一なども関わり、大正二年に建立された像の高さは三メートルで台座は四メートルもあり、沢山の勲章も誇らしい大礼服姿で堂々とした立派な立像だった。当時この場所は木立に囲まれた静かな木母寺境内だったというが、寺が移転してこの像だけが残ったという。今は周囲が高層マンションだらけで時の移ろいを感じた。

園へ移動し昼食をとった。スカイツリーを眺めながら桜吹雪が舞う公園周辺で、江戸前天婦羅や練馬大根に佃煮や深川めしなど江戸づくしのお弁当に舌鼓を打つ。まさに『春のうららの隅田川』が流れきそうなウキウキのお花見弁当だった。この瞬りに少年野球場があつたが、説明板を読むと何と王貞治氏も少年時代にここで育つたと書かれていた。この公園内には榎本武揚の篆額で墨堤の桜の由来を記した『墨堤植桜之碑』があった。

この地の桜は四代将軍家綱の命で始まり、明治に入り成島柳北や大倉喜八郎を始め多くの住民が寄付をして守り育ててきたという。そこには大勢の花見客を集め

【榎本武揚像】

めることによって、堤防の地固めを図るという一石二鳥の目的があったそうだ。堤の隣には正岡子規が滞在したという『長命寺桜もち・山本や』があり店の前には購入者の長蛇の列が。もちろん我等が参加者達も花より団子と並んだことは言うまでもなく、おまけに向かい側にある『言問団子』にも急ぎ足で向かっていった逞しい人達も。



全生庵の山岡鉄舟の墓

【普門山全生庵】

バスは隅田川を渡り谷中へ移動。山岡

鉄舟が創建し菩提寺でもある『普門山全生庵』に到着。この寺には五年前にも会で訪れたが、お江戸巡りでは鉄舟の墓参りを欠かせないと再訪した。境内に入り正面本堂の右側を回り込むと、まず目を引いたのは北村西望作という黄金に輝く大観音像。左側には伊豆の長八が鉄舟の病氣平癒を願い制作したという地蔵菩薩が出迎えてくれる。その墓地の一番奥の、少し小高い場所に鉄舟の墓標があった。持参した線香に火を付け皆で手を合わせる。近くには石坂周造や松岡萬、そして三遊亭圓朝など縁のある人たちの墓もあった。



谷中靈園の慶喜公の墓

指した。垣根で囲まれたその墓標は神式の円墳状形をしていて、隣にある美賀子夫人の墓と並び、その後ろには側室達の墓も建っていた。その墓所入口近くに慶喜公の十男で勝海舟の養子となつた勝精の墓もあり、それも神式の円墳状形だった。次に森繁久彌の墓の横を通り、渋沢栄一の墓所へ行った。手入れの行き届いた広い敷地内に二人の妻の墓と共にすつきりと建っていた。その墓標の見つめる先は慶喜公の墓所で、まるで見守るように建つており、永遠の主従関係の深さを物語っていた。次いで岸田吟香の墓所へ

行く。麗子像で有名な岸田劉生の父で、清水の美濃輪稻荷神社にある『神徳靈験碑』の建立に関係があるので、とみられる清水に関係ある人物だ。その他、今回は行けなかつたが横山大観や鏑木清方などの画伯や、三保と関係が深い小説家の廣津和郎の墓所もあり興味は尽きない、またゆっくりと訪ね歩きたい場所でもあった。

【諏訪山吉祥寺】



吉祥寺の榎本武揚の墓と経蔵

最後に訪れたのは本駒込にある榎本武揚の墓所『諏訪山吉祥寺』である。山門から駐車場に続く美しい桜並木の道は、車で走るのは申し訳ないような気分だった。ここでは戸田書店出版『季刊清水』の編集に携わる石原雅彦さんがお待ちかねで、詳しい案内をして貰った。ところがその墓所では大木が根を張り、現在は撤去の工事中だった。でもミニユンボの作業員は快く作業の手を止めて見学をさせてくれた。ところでこの寺は地名の吉祥寺にはないのに、なぜ寺名が吉祥寺なのか不思議に思って調べてみた。それによると江戸時代に起こった大火の際に、水道橋にあった寺の吉祥寺は今の本駒込へ移転したが、その寺の門前にいた人々は武藏野へ移住し地名を吉祥寺と名乗つたからだという、何ともややこしい話であ

あった。この寺には空襲から免れた古くて趣がある経蔵があり、石原さんの説明ではその礎石は船で運んだ伊豆石だそうである。ここも二宮尊徳や多くの幕臣の墓もあるという由緒ある寺だった。

帰り道の東名高速道路では案の定、横浜辺りまで渋滞に巻き込まれた。しかし車内では研修旅行の纏めの講話や、旅姿三人男の歌手当てクイズなどをしながら、十九時半には無事に清水駅まで戻り楽しかった史跡探訪ツアーフを締め括った。

次郎長の葬儀と墓石について

次郎長翁を知る会 運営委員 中田元比古



樋口一葉

今から一二〇年前の明治二十六年六月十二日、次郎長こと山本長五郎が七十四歳の波乱に満ちた生涯を終えた。晩年暮らした波止場の船宿未廣にて、妻のお蝶さんや多くの乾方に見守られて、畠の上の大往生だった。東海の大侠客として社会事業家として既にその名が広く知られた波止場の船宿未廣にて、妻のお蝶

さんや子分数百人参加」と報じられたのをはじめ、当時の東京の新聞各社が十五日付の『時事日報』で「七十四歳で死去、子分数百人参加」と報じられたのを行われた葬儀についても追加報道をしている。

小説家の樋口一葉もこの報道に目を留め、「明治二十六年の事件」として六月十八日の日記に、「侠客駿河の次郎長死去（七十四歳）本日葬儀。会するものは

千余名。上武甲の三州より博徒の頭たちたるもの会する五百名と聞えたり」と記し関心を寄せている。

また榎本武揚とも親交があった、民権派ジャーナリストの成島柳北が興した朝野新聞は、次郎長の死去について数日にわたり取り上げ、六月二十日第三面に『侠客次郎長の葬儀』として「静岡県下

の遊侠兒山本長五郎（綽名次郎長）の死去せしことは、前号の紙上に報道しせしが、今までその葬儀の模様を聞くに、葬式はさる十五日、清水波止場の自宅を出棺し同港梅蔭寺へ埋葬せり。当日の会葬者は京浜、上、武、遠、三の諸方より来られるものと、これに近隣の乾児、盟友、親戚等にて、その数はほとんど数千の上に出たりと伝え聞く」と書いた。

この会葬者に地元一般人も加わって、参列者は三千人を越えた。

列の先頭が梅蔭寺に着いて、後尾はまだ波止場の未廣だったという伝説が、地元に残っている。

伝説の葬儀ルート

旧清水市で昭和六十年に発行された『まちの想い出』の中に、当時の古老人少年期に体験した「次郎長の葬儀」の回想録が記載されている。

次郎長の葬儀

松井町

小林 保三（九十六歳）

十二歳のとき、次郎長さんの葬式を見に行きました。山岡鉄舟や子分衆を先頭に、官軍や旧幕府の人たちの二列に並んだ行列が、次郎長さんが住んでいた波止場から港橋まで、長く続いたんですよ。（略）

広報しみず『まちの想い出』昭53・3・15号

小林少年の記憶では、先頭を歩く人によほど風格を感じたのか、

当時はもう鬼籍の人の筈の山岡

鉄舟と勘違いをしてはいるが、波止場から港橋を渡り、本町通りを

通って上二丁目の通りを下清水八幡神社の方角へ折れ、牛道と呼ばれる神社脇の坂道を上り、久能街道に突き当たつて

南に折れ、新定院に至る手前百メー

トルあたりで梅蔭寺の裏門へと続く

小路に向かって参

列が続いたことが文章からはっきりと読み取れる。

現在は、梅蔭寺の入り口は南西側にあり、柳宮通りや次郎長生家から西に通つて梅蔭寺へ行つたのですが、そりやあ、立派なもんでした。わしら子供は、花かごからばらまかれる穴空き錢を拾つたんですよ。（略）

行列は、本町、下清水八幡を通つて梅蔭寺へ行つたのですが、そりやあ、立派なもんでした。わしら子供は、花かごからばらまかれる穴空き錢を拾つたんですよ。（略）

距離約二km。徒歩にて約三十分。今は車の行きかいも困難な古道・旧道ではあるが、本町は次郎長の支持者であったが、次郎長葬儀当時は現在の様な道はまだ開通しておらず、かなり迂回した道程であったのだ。

上萬の性格は穏やかで、生涯に喧嘩を一度もせず、他の一家同士の仲裁や庶民のようす相談に努め、寺銭をことごとく身内の者の女房や子に与えたり、旅人に至れり尽くせりで遇したので、親分の周りに自然ど人が集まってきたという。このような気質なので、大きな抗争が起

次郎長の墓石について

梅蔭寺の「侠客 清水次郎長之墓」

次郎長翁が亡くなった明治二十六年六月十二日の翌年、一周忌に建立された。揮毫は榎本武揚。多摩石の立派な墓石は東京墨田区本所の上萬が調達し「石長」という本所の石工に彫らせたもの。墓石の台座は次郎長の秘蔵つ子乾分の当目の岩吉が焼津浜當目から運んだ自然石である。なお、次郎長の墓石は、建立の際に墨田区業平の法性寺にある上萬の墓と分けたと伝えられていて、「侠客上萬墓」の揮毫もまた次郎長墓同様、榎本武揚の書であるという。

「上萬」は本名を藤江万吉という。屋号を上総屋としたため、上総屋の萬吉がつまって上萬と呼ばれた。幕末に南葛に広大な繩張りを築き、配下を三千人持つ大親分で、清水次郎長とも呑み分け(五分)の兄弟分であった。



きても上萬が出てくるだけで和解が成立した。上萬は「南葛飾十万石」と言われる東京の東南部から千葉にかけて現在の総武線沿線に広大な縄張りを持ったが、これらの縄張りは喧嘩ではなくこのようないう仲裁の謝礼として得たものであった。



榎本武揚揮毫 侠客次郎長之墓



次郎長墓建立の際に分けたと云われる業平の法性寺の侠客上萬墓

晩年は実子の萬次郎に跡目を譲り、「上

方亭」という寄席を経営して悠々自適の生活を送り、明治三十五年（一九〇二）に亡くなった。

地元の古老人の話では、上萬の没後、榎本武揚が向島の邸宅から馬に乗り毎日

様に法性寺へ墓参に来ていたという。

【編集室より】

・会報四二号をお届けいたします。コロナ過も漸く落ち着きを見せて、当会恒例の研修旅行を再開し、念願の「上萬墓」の視察を果たすことが出来ました。

・「歴史に“もし”は無い」とよくい

ますが、榎本武揚が官軍に抵抗して幕

府軍艦八隻を率いて品川を脱出し、蝦夷をめざす行動を起こしていなければ

どうであつたでしょうか。咸臨丸は明治元年のあの日に清水港へ来ていただろか？ 不幸な死者も出ず、次郎長

の侠魂の出番は無かったのでは？ そして次郎長と山岡鉄舟との出会いは？ 博

徒を卒業し、社会事業家としての後半生はあつただろうか？ 東海遊侠伝は世の中に出ていたのだろうか？ 浪曲や映画は・・・？ 妄想は尽きない。

次郎長は榎本武揚から、山岡鉄舟のような先導的な影響を直接受けではない。しかし榎本武揚の起こした行動は、巡り巡つて次郎長の将来に大きな影響を与えた。その次郎長の人生の終止符に墓石に揮毫した人物もまた榎本武揚であるというのも巡りあわせの妙である。

・山本副会長の新資料の発表を読み、晩年は勿論、「女性にも学問を！」という

演説にはびっくりした。生活弱者を助けたり、子供をかわいがったり、男女差別や格差など現代社会においても問題でいる課題を先駆的にやろうとした事が凄い！ 大変感動しました。

・次郎長翁を知る会設立以来三十年の間に、これまで四二号の会報を発刊して参りました。創作ではない明治以降の次郎長翁の功績にスポットを当て、眞面目に、バックナンバーの編集と再版を検討中。会の活動・研究の足跡を市民に広く伝えられたらという想いです。

（中田）

【お知らせ】

未廣が港橋傍らに復元されて二十年が経過し、この度修繕工事の為、令和五年十一月から令和六年二月を予定として休館いたします。

次郎長翁を知る会 会報「次郎長」42号

令和5年6月1日発行

発行／編集

次郎長翁を知る会

会長 府川充宏

事務局

(公財)するが企画観光局

清水事務所内

〒424-0806

静岡県静岡市清水区辻1-1-3-103

Tel 054-388-9181 Fax 054-388-9182

www.jirocho.com

minowa.jirocho@gmail.com